

海外の浄土真宗事情

第7回 南米開教の沿革と歩み

南米開教は、現在、ブラジルを中心に、アルゼンチン、ペルー、パラグアイにまで教線を広げている。浄土真宗本願寺派が、ブラジルで開教を公式に開始したのは、他国の移民と同様にブラジルでも戦時中には日系人の行動が制限を受けたこともあって、一九五〇（昭和二十五年）年であった。それまでに農業移民として渡伯していた僧侶や門信徒を組織して、ブラジル開教教務所を開設し、全伯仏教会を発足させた。

ブラジルでの開教は戦後、当地での信教の自由が認められた後に開始されたため、北米・ハワイにおいて生じたアメリカニゼーションのような同化の波に、南米教団が晒（さら）されることはなかった。

むしろ、戦後の在ブラジル日系人社会を覆ったのは、いわゆる「勝ち組・負け組」と呼ばれる第二次世界大戦の敗戦をめぐる混乱であった。勝ち組の思いはたとえブラジルにあっても日本人は日本人だという意識であり、であればこそ敗戦を受け入れることがなかったのである。

また負け組は認識派とも呼ばれ、ブラジルにいる以上、ブラジル社会に溶け込まなくてはならないという意識であり、だから負けは負けと事実を受け止めようという人々であった。

ブラジルでは日本は敵国であり、戦時中には集会の禁止や公共場所での日本語の使用禁止といった処置がとられたことから、的確な情報が伝わりにくくなり混乱に拍車をかけてしまった。

こうした日系社会の混乱のさなかにあつて、ブラジル開教教務所は、「勝ち組・負け組」の融和をめざす布教方針をとうとうとした。しかし東・西両本願寺の所属をめぐる混乱もあいまって、全伯仏教会に組織の綻び（ほころび）が目立つようになり、一九五三（昭和二十八）年、初代開教教務所長四邨覚勝は、志半ばにして日本へ帰国した。

その後、一九五四（昭和二十九）年、約四か月に及ぶ勝如宗主第一次南米ご巡教を緒として、本願寺派主導の開教が進められることとなり、一九五五（昭和



2015（平成27）年南米仏教婦人会大会（レジストロ本願寺教会主催）

三十）年には「本派本願寺南米教団」がブラジル政府より宗教法人として認可された。こうして、敗戦を契機として祖国への帰国を断念することを余儀なくされた多くの移民たちにとって、精神的な母国として、教団がその役割を担うようになったのである。こうした中で教団は開教使の絶対人数の不足を補うために、法

務だけを行う法務士制度などを整備していった。

一九五八（昭和三十三年）、日本移民五〇周年を記念して伯国別院本堂が建立された時、サンパウロ市における日系人の人口は約六万二〇〇〇人。急速に都市化し膨張するサンパウロ市において、日系社会がその存在感を高めていった頃であった。その中であって、日系二世の教育問題への対策も含めた教化法として、寺院に日本語学校を開設経営したことは、南米教団が自ら認じたブラジルにおける役割を物語る好例である。教団はその後も、日系社会の成長に合わせて勢力を拡大していく。

一方、ブラジルにおける特にヨーロッパ系知識人が仏教に関心をもち、一九五五年には教団内に日伯仏教研究会が発足され、そこから初の非日系人僧侶であるフランシスコ・コッポラ（釋佛蘭）が生まれたことや、同会を牽引したジョアン・バチスタ・デピエの翻訳や講演活動などは記憶に留めておきたい。

一九六四（昭和三十九）年頃から教団は、日系二世・三世への教化を目的とする「第二期開教対策」を打ち立て、仏教青年会大会の開催や、日本への留学生の派遣を始めた。この二世・三世への布教は、彼ら非日系人なくては成し得なかった。この流れは、やがて、ムリロ・ヌーネス・デ・アゼベード開教使、グスターボ・ピント開教使、そしてマリア・アンジェラ・デ・アンドラーヂ開教使補に受け継がれることとなる。

その後南米教団は一時教勢が激減するような事件を起こしながらも、七〇年代に盛り返し、全門徒からの募財によって建立されたブラジリア本願寺。日系社会初の団体旅行となった親鸞聖人ご生誕八〇〇年・立教開宗七五〇年慶讃法要の四五〇人の訪日参拝団。約三〇〇〇人を動員の南米初開催となった第六回世界仏教婦人会大会。そして、これも全門徒の募財で建設された伯国別院に付設された会館など、教団史に映える出来事であった。

情報コーナー



2016（平成28）年南米仏教青年会大会 於伯国別院

しかし一九八〇年代から一九九〇年代は、教団が依拠する日系社会が変容していった時代であった。「ブラジルの奇跡」と呼ばれた一九七〇年代前半の好景気の揺り返しが、一九八〇年代には強烈なインフレーション（例、一九八九年のインフレ率は約一七八二％）となつてブラジル経済を襲った。同時代の教団に目を移すと、一九七五（昭和五十）年、日本か

ら派遣された、多くの若い開教使の参加によって、開教使団の平均年齢は教団設立以来最低の値を示したが、彼らが帰国した一九八〇年後半には、もとの姿に戻った。この開教使の帰国の動きに沿うかのごとく、日系ブラジル人の日本への就労「delestage」は始まった。一九九〇（平成二）年の出入国管理法の改正により、日系人の入国制限が緩和されてから、delestageは増加の一途をたどり、日本からブラジルへ渡った移民の総数を大きく上回る、三〇万人以上の日系ブラジル人が海を渡った。

日系社会の変容は、その混血率にも見ることができ。一九八八（昭和六十三）年の日系人と非日系人の混血率は、四五・九％。その率は世代を重ねるごとに高まり、「日系人」の輪郭をおぼろげとさせた。そこに、delestageが起こり、それまでの日系社会は求心力を失っていく。教団が教勢を伸張していた頃の日系社会は、今はもうない。

教団最大の年間行事である南米仏教婦



2016（平成28）年南米仏教壮年会大会 於リンス本願寺教会

人会大会は一九九七（平成九）年を最後に参加者数一千人を切り、現在は七〇〇人を下回っている。これまで非日系人開教使らが警鐘をならしてきた教団存亡の危機は、日ごとにその現実味を増している。しかし、そうであればこそ、この現実を移行期として捉え、日系社会のみに依存しない教団づくりのための歩みを始めることができるのかもしれない。

（南米開教本部）